瀕 死 の 王

——アサンテ族における相剋の系譜——

阿 久 津 昌 三*

The Dying King: The Genealogy of Conflict among the Asante

Shozo Akutsu**

The idiom *nana asumasi awu* ('king is dead') was never used of an *Asantehene*. On such phrase as 'king is absent' or 'king is departed', and seemingly the commonest — *dupon kесе atutu* — described the death of an *Asantehene* in terms of the uprooting or fall *gyadua* (pl. *gyannua*), a mighty shade tree. The accession of the new king may occur immediately within forty days upon the death, or dethronement of the former monarch, since the funeral and enthronement of the king become part of the same sequence of events.

On the death or dethronement of an *Asantehene*, the queenmother (*Asantehemma*) takes over as regent. Afterwards, the kingmakers (*werempe*) formerly asked an *Asantehemma* to nominate a candidate for their approval, and gave her three succeeding options at the end of which the councillors could in turn present a candidate for her approval. The *Asantehemma* plays an important role in the succession of the throne, and decide the new king according to the Asante rules of succession.

In ontological terms, it is descent which is important to the structure of Oyoko dynasty; in phenomenological terms, it is marriage. But, in structural terms, from the viewpoints of the genealogical matrix and the pattern of marriage, the distribution of *Asantehenes* is regarded as a statement to the matrification of the attributes of kingship as well as to the patrification of the politics of kingship. Asante politics can be seen as stretched taut between opposing forces: the centripetal one of matrification and the centrifugal one of patrification.

In this paper, my concern is to try to lay out more precisely some of the factors involved in systems of Asante succession of the throne, to analyse the meanings of death and mortuary rituals, and to specify some of enthronement and mortuary rituals according to Akan calendar.

目 次

I 王位の継承方式

- 1 王と王母の継承方式
- 2 王と王母の在位年数

II 王の死と政治的身体

1 「王の死」の隠喩

2 王の死因

3 死体の二次埋葬と生贄

III 王の葬儀と即位式

1 アカン暦

2 葬儀と即位式の選日

* 信州大学教育学部

** Shinshu University

I 王位の継承方式

1 王と王母の継承方式

イギリスの社会人類学者ジャック・グディは、アフリカ、ヨーロッパ、アジアの広範な事例をとりあげて、「王位継承」の形式分類を試みている [Goody 1966:1-56]。アサンテ族における母系の継承システムは、グディが提起する「王位継承モデル」に置き換えてみるならば、次のように表される。すなわち、(a)直系=垂直(母子)型、(b)傍系=水平(兄弟)型という2つに分類される。さらに、(b)傍系=水平(兄弟)型は、4つの亜型、すなわち、(b₁)傍系の包含、(b₂)傍系の消去、(b₃)傍系の消去をとまなう循環、(b₄)すべての傍系を含めた循環、に下位分類される。

王位継承は、「複数のものへの分裂と、単一のものへの集中という、二つの相矛盾する力の葛藤のあやうい均衡に支えられている」[川田 1976:90]。アサンテ族における王位継承の方式は、「アサンテ族における王と王母の系譜」(第1図)にみられるように、複雑な継承システムがとられている。

アサンテ族における王と王母の系譜構造は、Maanu と呼ばれる女性 (Abena Japae の娘、Birempormaa Piesie の孫)⁽¹⁾ を直系とするものからなる。この系譜構造は、アサンテ族における王と王母の系譜を簡略化したものにすぎない。

複雑な継承規則に従っているにしても、「王母」(ahemma) に焦点をあててみるならば、アサンテ族における王位継承は非常に明確である。以下、第1図を参照して、王の名称は、[K]の記号を、王母の名称は [Q]の記号を用いて表記する。

[Q 1]と[K 2], [Q 2]と[K 3], [Q 3]と[K 4], [Q 4]と[K 5], [K 6], [K 7], [K 8], [Q 6]と[K 9], [Q 9]と[K10], [K11], [Q10]と[K12], [K13]は母子関係にある。[Q 4]と[K 5]がフィクションとしての擬似的な母子関係であるとすれば、アサンテ族における王と王母の系譜は分断されてしまう。ともあれ、アサンテ族における王位継承は、15事例のうち12事例が直系=垂直(母子)型のモデルが適用される。しかしながら、直系=垂直(母子)型のモデルが適用されるといっても、王と王母が

第1図 アサンテ族における王と王母の系譜

ひとつのセットとして個別的に参照されるだけである。

[K 5] [K 6] [K 7] [K 8], [K10] [K 11], [K12] [K13] の王位継承の群は、傍系＝水平(兄弟)型のモデルが適用されるが、これらの群は、[Q 4], [Q 9], [Q10]という王母との関係で王位の継承規則にしたがっている。言い換えれば、アサンテ族における王位継承の方式は、「王母」が王権を生み出す装置として機能しており、王母が王位の継承方式を決定する要因となっているということである。しかしながら、王母位の継承方式については、王位の継承方式と比較しても、アサンテ族に関する民族誌のなかにほとんど記述されていない。歴史的な史料は黙して語らない。王母位の継承については、個々の事例において、どのような政治的な背景から王母位に就いたのかを検討しなければならないのである。

ところで、従来のアフリカの王母論では、「二元統治」という相互補完的な関係や「脱共同体」(特に「ローヤル・インセスト原理」[du Heusch 1962:146-147])のなかで位置づけられている。アサンテ族における王(*Asantehene*)と王母(*Asantehemma*)との関係では、王母は、アサンテ族の慣習を管理するものとされている。王母は、王の薨去後、または王位を剝奪されたものを含む退位後、王位継承者を選出するという役割をはたす。王母は、祖先との系譜からの真の「出目」という観点から、潜在的な後継者をも含めて、王位継承をするに適当な人物を選出するのである。「王母と評議員」たちは、王族の母系のリネージのリーダーとして、いくつかの規則にしたがって、王位継承者を決める。王母は、これらの規則を統轄し、王位継承を秩序づけるのである[Arhin 1983:91-98]。

したがって、アサンテ族における王位継承は、王朝を統合する「母系化」のパターンと、王朝を分裂させる「父系化」のパターンとの力関係でとらえられなければならない。すなわち、前者は、「王権の属性」にかかわり、後者は、「王権のポリティックス」にかかわる[Wilks 1975:328-329]。

アサンテ族における王位継承の方式は、王の薨去後、新しく選出された王がもつ「政治的身体」

の意味論的な解釈から説明されなければならない。

アサンテ族では、一般的に、個人は、いわゆる「身体」(*nipa dua*)、「血液」(*mogya*)、「精霊」(*ntoro*「精液」の意)、「靈魂」(*kra*)、「人格」(*sunsum*)という5つの諸要素からなると信じられている[Akwabi-Ameyaw 1982:333]。「血液」(*mogya*)は、母とその氏族(*nton*)⁽²⁾から継承されるものである。「精霊」(*ntoro*)は、父とその氏族(*nton*)から継承する。

*ntoro*は、「精液」、「族外婚の区分」(より正確な意味では「擬制的な儀礼の区分」)[Fortes 1950:266; 1969:198]を意味している。河や湖などの精霊の神々が崇拝の対象となっており、精霊(*ntoro*)の楔ぎをする日が決められている⁽³⁾。

また、アサンテ族では、「靈魂」(*kra*)は、病気にかかったり、恐怖に襲われたりすると、一時的に身体から遊離するものと考えられている。この靈魂が遊離した状態は、*kra adwane* という。この靈魂は、至高神オニャンコポン(*Onyankopon*)から受け継いだものである。人間が死ぬと、この靈魂は身体から離れ、祖先たちの精神的な世界に帰る。

アサンテ族では、身体は、容器としてのいわゆる「身体」、「血液」、「精霊」、「靈魂」、「人格」という5つの諸要素からなっている。

王位継承という文脈では、新しく選出された王は、次のような諸条件を満たさなければならない。

- (1) 容器としての身体に関しては、王は身体に物理的な損傷を受けていないこと。
- (2) その人物の人格が、知性に富み、謙遜で、寛容であり、なおかつ男らしいこと[Busia 1951:9]。
- (3) Oyoko という王族の母とある特定の *ntoro* 集団(例えば、Bosommuru *ntoro*)⁽⁴⁾に属する父との間に生まれたものであるということ。
- (4) 出生後、至高神から受け継いだ靈魂があるが、王位を篡奪された王を除いた先王たちの靈魂を受け継ぐこと。つまり、即位式において、これらの靈魂が入れ替わるのである。

アサンテ族における王位継承の方式は、これらの4つの条件を満たさなければならないのである。

第1表 アサンテ族における王朝の系譜

House of Osei Tutu (H ₁)	House of Opoku Ware (H ₂)	House of Kwaku Dua (H ₃)	Others (H ₄)
[K 1] Osei Tutu I			
	[K 2] Opoku Ware I		
			[K 3] Kusi Obodom
[K 4] Osei Kwadwo			
			[K 5] Osei Kwame
	[K 6] Opoku Fofie		
[K 7] Osei Bonsu			
[K 8] Osei Yaw →			
		[K 9] Kwaku Dua I	
		← [K 10] Kofi Kakari	
		← [K 11] Mensa Bonsu	
		[K 12] Kwaku Dua II	
		[K 13] Agyeman Prempeh I	
[K 14] Osei Agyeman Prempeh II			
	[K 15] Opoku Ware II		

これらの条件がどのように機能しているのかについては、個々の事例から説明されなければならないが、ここでは、Oyoko という王族の母とある特定の *ntoro* 集団に属する父との間に生まれたという条件について検討する。

アサンテ族における統合と分裂の「王朝の系譜」は第1表のように表される。Osei Tutu の王家を H₁、Opoku Ware の王家を H₂、Kwaku Dua I の王家を H₃、その他の王家を H₄ とすれば、[K 1] H₁、[K 2] H₂、[K 3] H₄、[K 4] H₁、[K 5] H₄、[K 6] H₂、[K 7] H₁、[K 8] H₁₋₂、[K 9] H₃、[K 10] H₃₋₄、[K 11] H₃₋₄、[K 12] H₃、[K 13] H₃、[K 14] H₁、[K 15] H₂ となる。

アサンテ族における王朝の系譜は、4つの王家のなかでの力関係という動態的な側面をもつ。Oyoko という王族の母とある特定の *ntoro* 集団に属する父との間に生まれたものであるという条件から、王位継承のメカニズムがどのように機能しているのかについて2つの事例から説明する。

【事例1】 Osei と Owusu の名称体系と王位継承

[K 1] Osei Tutu は、Bosommuru *ntoro* の下位集団 Adufudee に属する。この下位集団の成員は、Osei と Owusu が互隔世代で名づけられる。すなわち、この系譜では、[K 1] Osei Tutu → Owusu Afriyie ([Q 3] と結婚) → [K 4] Osei Kwadwo → Owusu Ansa ([Q 4] と結婚) と Owusu Afriyie ([Q 8] と結婚) → [K 7] Osei Bonsu。この王朝の系譜では、王の互隔世代で、王子(*ahenemma*)と王母(*ohenemma*; すなわち *Asantehenemma*)との婚姻関係がみられる。また、[K 8] [K 14] の名称も Osei である。

【事例2】 Adu と Opoku の名称体系と王位継承

[K 2] Opoku Ware は、*Amakomhene* Adu Mensa を父とする Bosommuru *ntoro* の下位集団 Asafodee に属する。この下位集団の成員は、互隔世代で、Adu と Opoku と名づけられる。すなわ

ち、この系譜では、Adu Mensa→[K 2] Opoku Ware→Adu Twum ([Q 3] と結婚)→Opoku Kwame と [K 6] Opoku Fofie→Adusei Kra と Adu ([Q 4] の孫娘と結婚。不詳)。この王朝の系譜では、王子と王母との結婚、王子と王母の孫娘との結婚という婚姻関係がみられる。

アサンテ族における王位継承の方式は、[事例 1] と [事例 2] から、次のように説明することができる (第 1 図、第 1 表参照)。

Osei Tutu を直系とする王家 (H_1) のなかで、[K 1], [K 4], [K 7], [K 8], [K 14] の「王の名称」はすべて Osei である。Bosommuru *ntoro* の下位集団 Adufudee の成員は、Osei と Owusu が互隔世代で名づけられることから、この王家の系譜では、Osei を名のるものが王位を継承し、Owusu を名のるものは王母との結婚で次の世代に王権を生みだす構造になっている。

これに対し、Opoku Ware を直系とする王家 (H_2) のなかで、[K 2], [K 6], [K 15] の「王の名称」はすべて Opoku である。Bosommuru *ntoro* 下位集団 Asafodee の成員は、Adu と Opoku が互隔世代で名づけられることから、この王家の系譜では、Opoku が王位を継承し、Adu は王母またはその直系のものとの結婚で王権を生み出す構造になっている。

すなわち、アサンテ族における王位継承において、*ntoro* 集団 (特に、Bosommuru *ntoro* 集団) は、王母またはその直系のものとの結婚を通して「王権の属性」にかかわる。と同時に、王朝を分裂させる要因を含むという意味では、*ntoro* 集団は「王権のポリティックス」にかかわるのである。

2 王と王母の在位年数

西アフリカの諸王国では、『タリフ・アル・スーダン』(Ta'rikh al-Sūdān) と『タリフ・アル・ファターシュ』(Ta'rikh al-fattāsh) という古典的な史書に代表されるように、その系譜の歴史を綴る年代記を作成する伝統があった。

1820年代、アサンテ族の王都クマセ (Kumase) では、イスラム教徒は「カントマ」(Kantoma)⁽⁵⁾ と呼ばれていた。アル・ムスターファ (Muḥammad

b. al-Muṣṭafā Imam Ghunja) とも呼ばれるこのカントマは、アサンテの宮廷に絶えず列席するイスラム教徒のひとりであった。アル・ムスターファは、『ゴンジャ年代記』(Tadhkira 'li l-Muta'-akhirīn) を模範としてアサンテ王国の年代記を編纂した [Wilks 1975:347-348]。この史料は、イギリスが王都クマセを侵略した1874年に消滅したと伝えられている。

アサンテ族における王の系譜は、Bowdich [1819], Dupuis [1824], Reindorf [1895], Fuller [1921], Rattray [1929] のものがあるが、特に、Dupuis [1824] は、この年代記が消滅する以前に史料をひもとき、Sai Abuku ([K 2] Opoku Ware) から Sai Tutu Kwamin ([K 7] Osei Bonsu) までの王の在位期間について記述している。

一般的に、年代記という形式での記述のしかたは、出来事をもとにしたものか、暦をもとにしたものかであるが、アサンテ族では、文字で書かれた過去の出来事が「語り部」(*akyeame*, sing. *okyeame*) によって詠唱される。この場合、アサンテ族の詠唱では、並べ方はたいいてい王の治世というものがもとなっており、ひとりの王の治世に起きた出来事を短く要約したものである [Goody 1977:91-92]。

Bowdich [1819] は、この史料のなかに叙述されている王の即位年や退位年を写しとったが、イスラム暦からグレゴリオ暦に修正する作業において誤りをおかしたとされている [Wilks 1975:350]。アサンテ族における王の系譜が明確に設定されたのは1960年代にはいつからであり、Priestley & Wilks [1960:83-96] は、民族誌的な資料を詳細に分析することによって、アサンテ族における18世紀の王の即位年と退位年を比較検討し、王の系譜の修正案を提示している。

[K 1] Osei Tutu がいつ死んだのかについては、1712年と1717年を薨年とするものがあるが、アサンテ研究では、この王の薨年をめぐる論争になったという経緯がある。この論争は、Daaku [1968:40-44] と Fynn [1971:48-50] との間で行われたものである。Daaku [1968] は1712年薨年説、Fynn [1971] は1717年薨年説をとったが、

その後、Daaku [1976:46-47] は何らの根拠もなく1717年に訂正している。これらの論争の経緯については、Boahen [1975:91] に詳しい。

アサンテ族における王の在位がどの程度であったかについては、[K 1] [K 2] を除けば、ほぼ同定することができる。在位年数が短かったのは、毒殺された疑いのある [K 6] Opoku Fofie の2年と、殺害されたのか天然痘で病死したのか不明であるが、44日間王位に就いていた [K 12] Kwaku Dua II である。

30年以上王位に就いていたのは、[K 2] Opoku Ware の30年、[K 9] Kwaku Dua I の33年、[K 13] Agyeman Prempeh I の43年（ギニア湾沿岸部のエルミナ、シエラ・レオーネ、さらにはセイシェルへの国外追放の期間を除けば、実質的な在位年数は15年である）、[K 14] Osei Agyeman Prempeh II の39年がある。

王位を剝奪されたものを含む退位の事例では、[K 3] Kusi Obodom の14年、[K 5] Osei Kwame の21年、[K 10] Kofi Kakari の7年、[K 11]

第2表 アサンテ族における王と王母の在位年数

王 の 系 譜	在 位 期 間	生まれた年	薨去した年
[K 1] Osei Tutu	?	?	1712 or 1717?
[K 2] Opoku Ware	ca. 1720—1750	?	1750
[K 3] Kusi Obodom	1750—1764	?	1764
[K 4] Osei Kwadwo	1764—1777	ca. 1735	1777
[K 5] Osei Kwame	1777—1798	ca. 1764	1803
[K 6] Opoku Fofie	1798—1799	ca. 1775	1799
[K 7] Osei Bonsu	1800—1823	ca. 1779	1823
(Osei Tutu Kwame)			
[K 8] Osei Yaw Akoto	1824—1833	ca. 1800	1833
[K 9] Kwaku Dua I	1834—1867	ca. 1797	1867
[K 10] Kofi Kakari	1867—1874	ca. 1837	1884
[K 11] Mensa Bonsu	1874—1883	ca. 1840	1896
空位	1883—1884		
[K 12] Kwaku Dua II	1884	ca. 1860	1884
空位	1884—1888		
[K 13] Agyeman Prempeh I	1888—1931	ca. 1873	1931
[K 14] Osei Agyeman Prempeh II	1931—1970	1892	1970
[K 15] Opoku Ware II	1970—	1918	

王 母 の 系 譜	在 位 期 間	生まれた年	薨去した年
[Q 1] Nyaako Kusi Amoa	?	?	?
[Q 2] Nkatia Ntim Abamo	?	?	?
[Q 3] Akua Afriyie	?	?	?
[Q 4] Konadu Yaadom	?	ca. 1752	1809
[Q 5] Adoma Akosua	1809—1819	ca. 1765	1819
[Q 6] Ama Sewaa	?	ca. 1763	?
[Q 7] Yaa Dufie	?	?	?
[Q 8] Afua Sapon	?	?	ca. 1857
[Q 9] Afua Kobi	ca. 1857—1884	ca. 1815	1900
[Q 10] Yaa Kyaa	?	?	1917
[Q 11] Konadu Yaadom II	?	?	?
[Q 12] Ama Sewaa Nyaako	?	?	?

Mensa Bonsu の9年である。[K 4] Osei Kwadwo の死因は謎に包まれているが、在位は13年であった。[K 7] Osei Bonsu は病死、[K 8] Osei Yaw Akoto は自然死によるものであるが、それぞれの在位年数は23年と9年であった。

アサンテ族における王の在位年数を調べると、個々の「王」についてみれば、比較的在位年数の短かった王もいれば、在位年数の長かった王もいる。すなわち、在位年数には「ゆれ」がある⁽⁶⁾。

また、アサンテ族における王母の在位年数については、[Q 5] Adoma Akosua の10年と [Q 9] Afua Kobi の27年がわかるだけで、それ以外の王母の在位年数は不詳である。王母の在位年数については、王の在位年数に関するものと比較してもほとんど記述されていないのである⁽⁷⁾。

ところで、王の在位年数がどのように計算されていたのかに関しては、アサンテ北部の Techiman (「王の暦」の管理人 [Rattray 1923:114] と呼ばれる) において次のように行われていた。すなわち、一年を周期とする季節の移り変わりのある文化的に規定された時点で、王はひとつの金塊を差し出す。この金塊は毎年王権を更新するための新年の祭りのたびに真鍮製の容器 (*kuduo*) に保管される。王が死ぬと、ひとつの金塊がその容器からとりだされ、王位継承者の即位式のときに、その金塊は新しく在位年数を計算するために使われたという [Flight 1970:260]。言い換えれば、王の在位年数は、このひとつの金塊を除いた、年毎に加算された金塊を数えることによって計算するというものであった。

次に、王母が王権を生みだす装置として機能しており、王母が王位継承を決定するひとつの要(かなめ)となっているとすれば、個々の王が何歳で王位に就いているのかということは重要な手がかりである。[K 1] [K 2] [K 3] の出生年は不詳であるために、これらの王が何歳で王位に就いたかは不明である。その以外の王の即位年齢は、[K 4] 29歳、[K 5] 12歳、[K 6] 23歳、[K 7] 21歳、[K 8] 24歳、[K 9] 37歳、[K 10] 30歳、[K 11] 34歳、[K 12] 24歳、[K 13] 15歳、[K 14] [K 15] 52歳と概算することができる⁽⁸⁾。

若くして王位を継承したのは、[K 5] Osei Kwame と、約5年間の空位後に即位した [K 13] Agyeman Prempeh I である。Osei Kwame は1777年に12歳で王位に就いたが、1798年に王権を剝奪されて退位し、1803年におよそ39歳で薨去している。その死因は、服毒または呪術による自殺 [McCasie 1975:429] なのか、処刑 [Wilks 1975:343] によるものなのかは不明である。また、Agyeman Prempeh I は1894年に15歳で王位に就いたが、植民地政策のもとで国外追放された期間を含めると、長期にわたって王座の地位にあった。

アサンテ族における王母の即位年齢は、[Q 5] Adoma Akosua の44歳、[Q 9] Afua Kobi の42歳という2つの事例が分かるだけである。しかしながら、王母が、王の死後、または王位の剝奪を含む退位後に、新しい王位継承者を選ぶ重要な役割をはたすことから、王母が王母位に就くのは、かなり中年になってからということが予測できる。例えば、Afua Kobi は、[K 11] Mensa Bonsu と母子関係にあるが、この王を王位に就けたのは、当時59歳のときであった。ほぼ同じ時期に王母位を剝奪されて退いているが、1900年に85歳でこの世を去っている。

Ⅱ 王の死と政治的身体

1 「王の死」の隠喩

アフリカの多くの社会で、王の薨去は、「王の出發」とか「火が消えた」とか「夜の幕が降りた」という表現で公にふれられる。アサンテ族では、王の薨去には「王が死んだ」(*nana asumasi awu*) という慣用句は決して使われることはない。王の死について直接的に言及することは厳しく禁じられており、こうした行為は、重大な罪を犯したものとされている。この場合には、死罪になるという [Rattray 1927:108]。したがって、王の薨去について公にふれられる場合には、「木陰をつくる大樹が倒れた」(*dupon kesee atutu*) という隠喩を用いて表現される。この大樹は、*gyadua* (pl. *gyannua*; 学名 *Ficus spp.* [Irvine 1931:197]) と呼ばれる植物である。また、この植物は、*oman*

(sing. *aman*「国家」の意)の修飾語をつけて *omangyadua* という別称で呼ばれることもある。

したがって、アサンテ族において王の薨去は、「王が死んだ」という直接的な言いまわしではなく、樹木という植物隠喩系の慣用句を用いて表現される。

エリアーデは、樹木という植物隠喩系と宇宙樹のシンボリズムについて、次のように記述している。

「植物は生きている実在の表象であり、それみずから周期的に更新する生命の表象である。……生命は植物のシンボルを通してあらわされる。かくてわれわれは植物がそれみずから以外の、何物かをあらわす限りにおいて——一つの神的なものとなる——すなわち聖性を体現し且つ示す——との思想に立ち戻るのである。いかなる木、いかなる植物も一つの木、一つの植物として単純に聖なのではない。それらはある超越的実在にあずかるゆえに聖となるのであり、またそれらが超越的実在をあらわすゆえに聖なのである。聖別されることによって、個々の、「俗的な」植物種に変質させられる。聖の弁証法において、部分（一本の木、一つの植物）は全体（宇宙、生命）の価値を持ち、俗なる事実は聖なるものとなる」[Eliade 1958:333]。

アサンテ族において大樹は、生産と破壊という混沌とした自然の＜力＞を視覚的に記憶のなかにとどめる意味作用がある。植物は、生きている実在の表象であり、それみずから周期的に更新する生命の表象であるが、これらの樹木には、潜在的な精霊 (*sasa*) が宿っていると信じられている。だから、樹木を切り倒すには、人間の葬儀と同じ手続きを経て、樹木の葬儀を行うのが慣わしであった [Rattray 1927:182-187]。

アサンテ族におけるすべての集落には、生命の＜力＞のシンボルとして「神の木」(*nyame dua*) と呼ばれる樹木があり、国家の繁栄と作物の豊穡をあらわすナチュラル・シンボルズ [Douglas 1970] として機能している⁽⁹⁾。

例えば、アサンテ族の王都クマシという都市の綴りは、*kum* (*kum* の木) と *ase* (～の下で) という語源から別称のクマセ (*Kumase*) をローマ

字化して、行政上の名称としたものである。すなわち、王都クマセは「クムの木の下で」形成された都市であるという伝承によるものである。王都クマセの名称は、植物隠喩系と密接に結びついたものであるが、アサンテ族には、植物隠喩系のもものと密接に結びついた都市の名称がある⁽¹⁰⁾。

ところで、植物隠喩系と都市の名称について詳細に立証することはできないが、アサンテ族において植物隠喩系と「熱」/「冷」の観念は文化の基層をなしていることは明らかである。アサンテ族では、一般的に、「冷たい」(*dwo*) は、色彩的に「白」で、静けさ、安らかさ、平穏、従順、保護された状態を示す。逆に、「熱い」(*ahohuru*) は、色彩的に「赤」で、暴力的、動揺、対決的、破壊的、威圧的を指す [Hagen 1970:8-14]。すなわち、「冷たい」という観念は、王と大樹の隠喩としての意味をもっている。

gyadua という言葉は、原義では「根」(*(o)gye* 派生語的には「受け入れる」の意)と「木」(*dua*) からなる。つまり、*gyadua* は「受け入れる木」「抱擁力のある木」を意味する。「彼は樹木の葉を掻きむしる」(*tew gyadua ahaban*) という慣用句の表現は「彼は王の命を呪詛する」(*ohyira ohene*) と同じ意味をもつことから、王と大樹という植物隠喩と「冷」/「熱」の観念は密接にかかわっている。「冷」/「熱」の観念は、「熱い」が自然、未開、混沌をあらわし、「冷たい」が文化、文明、秩序をあらわしている。言い換えれば、王の＜力＞は、大樹という植物隠喩系の意味と同じく、「冷たい」という観念によって生きている実在の象徴であり、それみずから周期的に更新する生命の象徴でもあるのだ。

ところで、*gyadua* という言葉には、「傘の木」という意味もある。アサンテ族における王権の標章のひとつに王を覆う「日傘」(*kyinie*; pl. *nkyinie*) がある [Patton 1984:64]。インド製、ヨーロッパ製の日傘が伝播する以前には、ある種類の広い葉のある植物が王をおおうに使われていたという [Kyerematen 1964:89]⁽¹¹⁾。

王の死は、木陰をつくる大樹と日傘によってつくりだされる象徴的な意味での庇護が取り除かれ

ることである。つまり、国家が「冷たい」状態から「熱い」状態に移行することを意味する。死せる王のための葬送歌は、「大樹が倒れた」とか「暑い日差しを遮る日傘がなくなった」という植物隠喩系の慣用句を用いて表現される。この植物隠喩系の慣用句は、次のような葬送歌のなかに表されている [McCaskie 1989:424-425]。

王が日傘をとってしまったなら
われわれは太陽で焼けて死んでしまう
あなたが遺したものがどんな状態なのかは御
存知のはずだ
雨が降れば飲み水を集めることはできる
あなたが一本の傘を贈ってくれるなら
あなたがワニの肝臓を贈ってくれるなら
料理するのに火を焚かなくとも生で食べるこ
とはできる

日傘の形態は、大樹に吊された葉のイメージを起源とするものであり、ここでは、象徴的に王をおおうために日傘という植物隠喩系のシンボルが利用されている⁽¹²⁾。アサンテヘネ(Asantehene)は、「金製の数多くの枝と葉のついた大樹のもとに座していた」と言われている。また、葬儀の際には、一般的に、死者のリニージの成員は、都市部では吊された黒い重厚な布か村落部では大樹の木の下に座っている [Patton 1984:93]。

かくして、アサンテ族における神聖なる王権では、植物隠喩系と「熱」/「冷」の観念が文化の基層をなしているのである。「大樹」、「王」、「日傘」は「冷たい」状態を表している。「王が死んだ」という表現は、「大樹が倒れた」、「日傘がとりさられた」という慣用句を用いて表される。この意味で、「大樹」、「王」、「日傘」は「聖なる天蓋」として

位置づけることができるのである。この理由から、王の死体(=政治的身体)は、「熱くも冷たくもない状態」[Anti 1974:72]で王墓のなかに置かなければならないのである。

2 王の死因

王の死について直接的な言い廻しが厳しく禁じられているとすれば、王の死は、アサンテ族にとって重大な意義をもっているはずである。「王の死因は何か」という主題は、アサンテ族の王権の深層にせまる問題になるはずである。つまり、王の死因にはどのような「政治力学」が働いているのであろうか。第3表は、アサンテ族における歴代の王たちの死因をまとめたものである。王の死は、戦死、自然死、病死、自殺、毒殺というように、余りにも多様な原因によるものであるが、何らかの政治的な陰謀が背後にあったと想像せざるを得ない。

[K1], [K2]の死因は、戦死と自然死である。アサンテ族が領土を拡大した時期にあたるだけに、度重なる戦乱のなかでの壮絶な死を思わせる⁽¹³⁾。王権の剝奪を含む退位後に起きた「王の死」は、[K3][K4][K5][K10][K11]の場合がこれに該当する。[K3] Kusi Obodomは重臣による王権の交替劇か視力の衰えによる退位であったが、王都クマセ郊外の村で数ヶ月後に死んでいる。[K5] Osei Kwame, [K10] Kofi Kakari, [K11] Mensa Bonsuの死因は、毒殺か呪詛⁽¹⁴⁾による病死で、その波瀾の一生を終えた。[K4] Osei Kwadwoの死因は不詳である。王権を剝奪された王たちは、一般の人びとと同様に、汚れのある人間とみなされ、特別の尊敬を受けな

第3表 アサンテ族における王の死因

	[K1]	[K2]	[K3]	[K4]	[K5]	[K6]	[K7]	[K8]	[K9]	[K10]	[K11]	[K12]	[K13]	[K14]
死 因	戦 死	自然死	病 死 または ?	?	自 殺 または 毒 殺	毒 殺	病 死	自然死	病 死	毒 殺	病 死 または 毒 殺	病 死 または 毒 殺	自然死	自然死
備 考 王権の剝奪を含む 退位			退 位	退 位	退 位					退 位	退 位			

くなる。

「自然死」と「病死」という範疇は明確に分けることはできないが、ここでは、歴史的な資料に従って自然死と病死と記述した。明らかに自然死によるというのは、[K 2], [K 8], [K 13], [K 14] だけである。[K 7] Osei Bonsu は、「脚と潰瘍と胸の煩いで」[Wilks 1975:174] 病気になり、政務に携わることもできず、王都クマセ郊外の村に引きこもった⁽¹⁵⁾。アサンテ族における歴代の王たちの死因は、病死または毒殺という事例が顕著にみられる。王の死には、何らかの陰謀が背後にあると予測することができるが、王の葬儀がどのように行われたのかということから分析することができる。

3 死体の二次埋葬と生贄

王の死については、その「葬儀」の秘儀性のために、アサンテ族に関する膨大な民族誌のなかでこの主題だけを扱ったものは少ないにもかかわらず、死をめぐる様々な立場は、人類学の中心的な課題となってきた。死や死の儀礼が、ただ単に社会的な価値を反映するというだけでなく、それらが社会的な価値を形成する<力>となっているからである。アサンテ族における王の葬儀については、個別的な事例を収束することによって推測することができる。例えば、次のような一次埋葬と二次埋葬、戦場で殺害された王の処遇という死せる王に関する記述がある。

「アカン諸族にとって、一般的に、戦争のさなかでの王の死は災いとは認められていなかった。通常、王の死体は、腐らないように燻製にした後で王都に運ばれた。死せる王には数多くの葬送の儀式が伴う。王の死体は軽く埋葬された。王墓は規則的に聖水で浄められた。しばらく後に、王の骨が掘り出され、洗浄され、黄金でくくりつけられてから、王廟のなかに王棺を納めた」[Priestley and Wilks 1975:213-218]。

「戦場で追いつめられ、逃げ場を失った状況では、王は自殺するのが慣わしであった。……呪術的な対象としての頭蓋骨は敵に渡してはならないものとされていた」[Bowdich 1819:289; Ram-

seyer and Kuhne 1875:213-218]。

死せる王には、一次埋葬と二次埋葬がある。王の薨去後、死体は、王宮 (*patokrom* と呼ばれる王宮の一画) に、15日間置かれる。生贄を削減しようとする場合には、この期間は3日から4日まで縮められた。王の死体は、深夜に、王都クマセの *bampanase* (木の名称に由来する地名) にある *barim keseɛ* (「大きな葬儀場」の意) に移された。王の死体は、象牙の角笛を吹く宮廷楽師 (*asokwafɔɔ*) や墓掘りによって、*asonyeso* (「零がたれる場所」の意) に運ばれた。

死体は80日後に移された。残った腐肉は削り落とされる。骨は関節ごとに繋ぎつけられてから、牛の油脂で燃やされた。さらに、遺骸のはいった王棺は *barim keseɛ* に用意された部屋に置かれた [Rattray 1927:112, 114-115; McCaskie 1989:427]。これが一次埋葬である。

一周忌には、新王は、*bantama* という王都クマセ郊外にある王廟に先王の遺骸を移す。毎年、王は、王廟において王族たちの遺骸を検分する。この儀式は、*afrinhyia* と呼ばれている。ところで、退位によって王権を剥奪された王たちの遺骸は、王廟に祀られることはない [Rattray 1927:118; Tordoff 1965:14n]⁽¹⁶⁾。

王の死にともなう生贄となる妻や殉葬者の数については、1867年4月27日の深夜に薨去した [K 9] Kwaku Dua I の葬儀の様相がこれらの状況を詳細に伝えている。

「4月27日から4月28日まで、王の死は知らされなかった。約200人の人々が、王の治癒に術策を施すということを口実に王宮のなかに引き込まれた。病気を緩和したり、駆逐したりする儀礼には、王宮の庭で小さな火が焚かれる。彼らは、壺に入っている聖水をふりかけた。……突然、王宮の戸が閉ざされ、すべての参加者が殺された」[McCaskie 1989:432]。

これは、王の死にともなう生贄の殺害の場面である。ところで、死んだ王の王子 (*ahenemma*, sing. *oheneba*) や父系の孫たち (*ahenenana*, sing. *ohenenana*) は、王都クマセの通りに殺到した。出会ったものであれば、だれかれとなく、無差別

に発砲し、刺したり、絞め殺したり、切り刻んで死に至らしめた。殺害を免れたのは、「黄金の椅子」にかかわる王族たち (*Oyoko koko adehyee*), 重臣たち, 王族の延臣たち—死刑執行人(*asokwafɔɔ*), 太鼓打ち (*akyeremadefɔɔ*), 象牙の角笛を吹く楽師 (*asokwafɔɔ*)—だけである。彼らは、王の葬儀において重要な役割をはたす人びとである。つまり、王子や王の父系の孫たちは、死せる王を奪うために、葬儀を掌握するのである。言い換えれば、王の葬儀というのは、王権の父系原理と母系原理との対抗関係が高度に緊張のなかにおかれることを意味するのである。

すべての生贄は打ち首にされた⁽¹⁷⁾。打ち首にされた頭は、籠に入れて王宮に運ばれた。これらの殺害は、王の死体が王宮のなかに移されてから行われるというのが慣わしであった。また、王都クマセには、「血の真ん中で」(*nkram*), 「妖術の石」(*bonsambuoho*), 「祭司がガツガツと食べる場所」(*diakomfoase*; 祭司は, *akomfoɔ*, sing. *ɔkomfoɔ*), 「真鍮製の水盤のある場所」(*ayakesee ho*) という「死のトポグラフィ—」と呼ばれる場所で、生贄となる妻たちと殉葬者たちは殺害された [Rattray 1927:112-114]。王棺が王宮に移されてから、27人の妻たちは、「ある場所に旅立つことの許しを乞う」(*me ka kyere wo se wo ko*) という慣用句を唱えてから処刑されたという⁽¹⁸⁾。

王の死にともない生贄となった妻や殉葬者の数については次のようなデータがある。4月28日から5月4日まで840人、5月6日から7月19日までに432人が殺害された。王の葬儀のクライマックスには164人が殺害されたという。実に、その総数は、1,436人にものぼるのである [McCaskie 1989:434]。この情景は、殺害という暴力によって意識的に、またそれ以上に計画的な静謐を演出するために行われた。しかしながら、この静謐のなかにも、死を恐れて乱れる妻たちの姿は想像に余りあることである。

Ⅲ 王の葬儀と即位式

1 アカン暦

アサンテ族では、グレゴリオ暦のほかに、*Adaduanan* と称するアカン暦がある。*Adaduanan* は語源的には *da* と *aduanan* からなる語で、*da* は「日」を、*aduanan* は「40」を指す。従って、*adaduanan* は「40日」を意味する。アカン暦が通称40日をサイクルとする暦と呼ばれるゆえんである [Bartle 1978:80-84]。この暦は、伝統暦の6日の「週」とグレゴリオ暦の7日の「週」を組みあわせたものである。毎日はいくつかの日の組み合わせからなっており、特定の組み合わせは特定の意味をもっている。

6日の「週」と7日の「週」の組み合わせのなかで、「不吉な日」(*dabone*; *da* は「日」、*bone* は「悪い」を意味する) は、42日をサイクルとするアカン暦のなかに4日ある。そのうちの2日は、*adae* である。この日には、アダエ儀礼という神聖王権にかかわる祖先崇拝の祭祀が行われる。すなわち、6日の「週」の *kuru* と7日の「週」の *wukuo* (「水曜」の意) と重なる [15] *kuruwukuo* と、6日の「週」の *kuru* と7日の「週」の *kwasi* (「日曜」の意) と重なる [33] *kurukwasie* には、それぞれ *Awukudae* (または *Wukuo-Adae*) と *Akwasi-dae* (または *Akwasi-Adae*) という王権の儀礼が行われる。この日には、葬式は行われない。また、人びとの死の知らせは王に報告されない。他の2日は、[6] *fodwo* と [24] *fofie* である。この日には、河や湖や洞窟に棲む精霊を浄める儀式が行われる⁽¹⁹⁾。

アサンテ族では、このような2種類の暦にもとづいて、王権の儀礼が行われる。アカン暦は、6日の「週」と7日の「週」との組み合わせからなる42日をサイクルとする反復的、周期的な性格をもっている。と同時に、42日を8倍か9倍した一年の周期がめぐってきた、ある文化的に規定された時点でオジュラ儀礼 (*Odwira*) が行われる⁽²⁰⁾。オジュラ儀礼が行われる前の42日間は、あらゆる騒々しさ、歌謡、太鼓を打つこと、踊りや葬式は禁じられている。これらの行為は、「アダエを転倒

させる」(*adaebutuw*)とされている。

第4表は、McCaskie [1980:179-200]を参照して、19世紀におけるアカン暦のなかの「不吉な日」(=聖なる日)「(*dabone*)」と「吉日」(*dapa*)とを分類したものである。Bは「不吉な日」、Gは「吉日」をあらわす。BB, BBBは、神聖なる王権にかかわる祖先崇拜の儀式や河や湖や洞窟に棲む精霊を鎮めるための儀式が行われる。GGは、即位式、

謁見の儀、調停などの政務に携わるのに好ましい日とされている。例えば、植民地行政官や宣教師たちは、王に謁見するために、この日まで王都クマセ郊外の村で待機し、「吉日」を選んで王都に入洛している。また、 $B > G$ は、どちらかと言えば「不吉な日」、 $B = G$ は、「不吉な日」と「吉日」の両義的な意味をあらわしている。

第4表 19世紀におけるアカン暦の「不吉な日」と「吉日」

[1] <i>nwonawukuo</i>	Wed	B		
[2] <i>nkyiyawo</i>	Thu	B		
[3] <i>kurufie</i>	Fri	B		
[4] <i>kwamemene</i>	Sat		B > G	
[5] <i>monokwasie</i>	Sun		?	
[6] <i>fodwo</i>	Mon	BB		
[7] <i>nwonabena</i>	Tue	B		
[8] <i>nkyiwukuo</i>	Wed		B = G	
[9] <i>kuruyawo</i>	Thu	B		
[10] <i>kwafie</i>	Fri	B		
[11] <i>monomemene</i>	Sat		B > G	
[12] <i>fokwasie</i>	Sun		?	
[13] <i>nwonadwo</i>	Mon	B		
[14] <i>nkyibena</i>	Tue	B		
[15] <i>kuruwukuo</i>	Wed	BB		
[16] <i>kwayawo</i>	Thu	B		
[17] <i>monofie</i>	Fri	B		
[18] <i>fomemene</i>	Sat		B > G	
[19] <i>nwonakwasie</i>	Sun		?	
[20] <i>nkyidwo</i>	Mon			G
[21] <i>kurubena</i>	Tue	B		
[22] <i>kwawukuo</i>	Wed	B		
[23] <i>monoyawo</i>	Thu	B		
[24] <i>fofie</i>	Fri	BBB		
[25] <i>nwonamemene</i>	Sat		B > G	
[26] <i>nkyikwasie</i>	Sun		?	
[27] <i>kurudwo</i>	Mon		B = G	
[28] <i>kwabena</i>	Tue	B		
[29] <i>monowukuo</i>	Wed	B		
[30] <i>foyawo</i>	Thu	B		
[31] <i>nwonafie</i>	Fri	B		
[32] <i>nkyimemene</i>	Sat		B > G	
[33] <i>kurukwasie</i>	Sun	BB		
[34] <i>kwadwo</i>	Mon			G
[35] <i>monobena</i>	Tue	B		
[36] <i>fowukuo</i>	Wed	B		
[37] <i>nwonayawo</i>	Thu	B		
[38] <i>nkyifie</i>	Fri	B		
[39] <i>kurumemene</i>	Sat		B > G	
[40] <i>kwakwasie</i>	Sun	B		
[41] <i>monodwo</i>	Mon			GG
[42] <i>fobena</i>	Tue	B		

2 葬儀と即位式の選日

アカン暦がアサンテ王国に導入されたのは、[K 7] Osei Bonsu の治世であった。この王は、イスラム世界への接近という政策をとり、「年代記」と「アカン暦」を作成した⁽²¹⁾。年代記の編纂とアカン暦の作成は、アサンテ族における王権の支配構造を確立することであった。

ところで、アサンテ族における歴代の王たちの葬儀と即位式に関して正確な日時が確定できるのは [K 9] Kwaku Dua I 以降である。

【事例 1】王位継承という交替劇のメカニズム

Kwaku Dua I は、王母の娘たちと王の息子たちとの婚姻関係を結ぶことで、精緻な系譜構造を確立した。この系譜は、1883年から1884年、1884年から1888年の空位期間を経て生きてくることになる。王の病因は不詳であるが、享年70歳で、1867年4月27日の深夜に薨去している [Wilks 1975:495; McCaskie 1989:413]。この日は、アカン暦の [4] *kwamemene* にあたる。王位継承の方式に従って、後継者に選ばれたのは [K 10] Kofi Kakari であった。王の選出機関と王母との手続きを経て、1867年5月27日に選出された。この日は [34] *kwadwo* にあたる。さらに、同年8月26日に儀礼的な認証を得て王位に就いた。

この事例は、王の薨去に伴う葬儀と、新王の即位式がどのように行われたのかについて、王位継承という王の交替劇のメカニズムを明らかにしてくれる。先王の薨日は、1867年4月27日であり、[4] *kwamemene* にあたる。一般的に、王の死後、8日、15日、22日、30日、80日には喪に服する儀式が行われる。すなわち、5月4日 ([11] *monomemene*)、5月11日 ([18] *fomemene*)、5月18日 ([25] *nkyimemene*)、7月20日 ([4] *kwamemene*) から7月27日 ([11] *monomemene*) まで行われた。つまり、喪に服する儀式は、王が死んだ曜日 (土曜; *memene*) 以後、8日目、15日目、22日目、30日目、80日目に行われた。

ところで、一般的に、アサンテ族における王位継承は、先王の死後、42日 (通称アカン暦は40日をサイクルとする暦で呼ばれている) 以内に、新しい王を選ぶというのが慣わしである [Bassing

and Kyerematen 1972:30]。そこで、王位継承の選日は、アカン暦の「吉日」のなかから [34] *kwadwo* が選ばれている。つまり、王の薨去後、30日経って選出されたことになる。さらに、新王が、正式に儀礼的な認証を受けたのは1867年8月26日である。これは、アカン暦で、[41] *monodwo* にあたる。

【事例 2】在位 44 日は何を意味するのか

[K 11] Mensa Bonsu は、1883年3月8日に退位している [McCaskie 1986:4]。翌年には、この王の実母でもある Afua Kobi とともに投獄されるという緊迫した状況下での退位であった [Wilks 1975:539]。この王の退位後、王位継承をめぐる争いが生じ、空位期間は1年以上も続いた。

空位期間を経て、新しく王に選出されたのは当時24歳の [K 12] Kwaku Dua I であった。この王がいつ王位に就いたのかは正確な日時を確定することはできなかった。この王に関する記録では、「1884年に即位したが、44日後に薨去した」 [Wilks 1975:368]、天然痘による病死か殺害されたのか不詳であるが、「1884年6月10日か6月11日に薨去した」 [Wilks 1975:560] という記述があるだけである。そこで、この記録を手がかりに、アカン暦との対応で王の即位したのがいつだったのか推論してみたい。

この王が薨去したのは6月10日か6月11日である。これらの両日は、アカン暦で、[41] *monodwo* か [42] *fobena* にあたる。「王位に就いてから44日後に薨去した」の記録から逆算すると、王位に就いたのは、6月10日の場合には4月27日 (アカン暦で、[40] *monodwo*) にあたる。アカン暦の「吉日」と「不吉な日」の分類から、この王が王位を継承したのは、1884年4月28日であったと推定できる。

ところで、この王が王位を継承したのが、1884年4月28日であったとすれば、この日に、新しく王が選出されただけなのか、それとも儀礼的な認証を経て正式に即位したのかは不明である。ここに、24歳にして王位に就き、在位44日間で死んだという「悲劇の王」の実像があると思われる。王位に就いてから44日後に薨去したという史実は、

第2図 アサンテ族における王位継承の選日

おそらく王位継承の交替劇—先王の退位から、空位期間の維持、新王の決定を経て儀礼的認証に至る一連の事象—では、42日をサイクルとするアカン暦のなかで、最低限必要な日数であったと推測できる。この王の死因が天然痘による病死なのか殺害されたのかは不明であるが、叔父にあたり、王位を剥奪されて退位した Kofi Kakari が2週間後の6月24日に薨去したという事実と照らし合わせてみると、この王の死はいかにも不自然である。在位期間を44日間と設定するにあたって何らかの

調整が施された可能性があると思われる。

【事例3】王の葬儀と儀礼的認証

〔K12〕 Kwaku Dua I が薨去したのは1884年6月11日であったと思われるが、その葬儀は、1894年5月2日〔Wilks 1975:587〕に行われた。実に、約10年後である。これには、王位継承をめぐる争いで、1884年から1888年まで続いた「空位」というアサンテの危機的な状況もかかわっている〔Lewin 1978:69-83〕。王位継承をめぐる争いの結果、〔K13〕 Agyeman Prempeh I（通称 Kwaku Dua

Ⅲ) が、王の選出機関の手続きを経て、1888年3月26日に新しい王に選出されている [Wilks 1975: 580]。儀礼的認証という正式な即位式が行われたのは、1894年6月11日である [Wilks 1975: 587]。新しい王に選ばれた1888年3月26日は、アカン暦で、[41] *monodwo* にあたる。また、約6年の歳月を経て、1894年5月2日に先王の葬儀を行っている。そして、6月11日(この日は、アカン暦で、[41] *monodwo* にあたる)に、儀礼的認証という正式な即位式を経て、王位に就いている。この事例は、王位を継承する者が決まらずに、王の葬儀が約10年遅れたというものである。言い換えれば、新しい王が選出されなければ、先王の葬儀を執行することはできないということである。従って、王の葬儀の終わりとともに、アカン暦のなかの「吉日」を選んで、新王は正式に王位に就くことができるのである。

脚注

- (1) アサンテ王国形成以前の歴史については、Reindorf [1966] がある。
- (2) アサンテ族の氏族 (*nton*) は、数多くのリニージ (*mmusua*, sing. *abusua*) からなる。また、その氏族 (*nton*) は、Aduana, Agona, Asakyri, Asenie, Asona, Bretuo, Ekoona, Oyoko という8つの外婚的な母系の氏族からなる。Oyoko は王族の氏族である。
- (3) *ntoro* の概念については、Asokore という村落で調査した Herskovits [1937] のものがある。
- (4) アサンテ族の *ntoro* 集団に関しては Busia [1954] と Danquah [1952] による分類がある。Busia [1954: 198] の *ntoro* 分類は次のとおりである。
 Bosommuru この下位集団には、Adufudee, Akrudee, Asadofee, Aninie などがある。
 Bosomptra この下位集団には、Aboadee, Ankamadua, Agyinadee などがあ
 る。
 Atwidee
 Agyaadee
 Amoadee
 Akankadee
 Abankadee
 また、Danquah [1952: 12] は、Bosomptra, Bosomtwi, Bosommuru, Bosompo (または Bosom-Nketea), Bosom-Dwerebe, Bosom-Akom, Bosomafi, Bosomafi, Bosomayesu, Bosom-Konsi, Bosomsika, Bosomafam, Bosomkrete という12の *ntoro* 集団に分類している。

(5) *Kantoma* という名称は、*Karamo Toghma* (*Toghma* は「学者」の意) の短縮形である。*Kantoma* は、王都クマセを中心とするサバンナ地帯と森林地帯、さらにはギニア湾沿岸部とを結ぶ長距離交易のためのルート・ブックを作成した。

(6) アサンテ族における「王」の在位年数の平均値をとると、[K13] の事例を考慮すれば、その平均値は18.77または16.62である。

また、データの数が n 個であり、ひとりひとりの「王」の在位年数の標準偏差を s とすれば、アサンテ族における王の在位年数の標準偏差は23.06または20.16になる。さらに、統計学では、 n 人の王の在位年数の平均値のゆれは、最も基本的な定理「中心極限定理」によって、 $\frac{s}{\sqrt{n}}$ と表される。アサンテ族における在位年数の平均値、標準偏差、平均値の「ゆれ」を算出しても、アサンテ族における王権のメカニズムがどのように機能していたのかについては説明することはできない。

(7) 王と王母の在位年数に関する統計学的な研究には、Akuapem 王国の事例 [Wilks 1964: 390-411] と Bono-Manso 王国の事例 [Flight 1970: 259-268; Meyerowitz 1972: 348-352] がある。

(8) アサンテ族における王の即位年齢の平均値は28.33である。また、その標準偏差は30.25、平均値のゆれは8.73である。

(9) 王都クマセで採集された集落語彙は、次のとおりである。

イエーイエ = *efie* (「居住空間」も指す)

ムラムラ = *akuraa* (pl. *nkuraa*)

マチーマチ = *kurom*

王都 = *ahenkuro*

クニークニ = *oman* (pl. *aman*)

イエと森林、内の世界と外の世界の対立は、*efie/wuram* で示される。この境界は、*kurotia* と呼ばれる。また、集落規模において、大きなマチは、小さなマチ (*kuroketewa*, *kurowa*, (*a*) *kura*) との対立関係において、*kurokese*, *akuropong* と表現される。

(10) 植物隠喩系の都市の名称は、ケンブリッジ大学に保管されている Meyor Fortes の資料と、ガーナ大学アフリカ研究所で収録された資料がある。

(11) これらの植物は、*anworomo* (学名不詳), *nkon-kuro* (学名不詳), *borodee* (学名 *Ananas stativus* 「パイナップル」), *mankani* (学名 *Xanthosoma sagittifolium* 「ココヤム」) である。

(12) アサンテ族における王権のシンボルについては、Kyerematen [1966] がある。

(13) [K2] Opoku Ware は、世にも稀な個性をもった人物としてアサンテの歴史のなかに登場してくる。その淵源のひとつに考えられるものに「出生の秘密」がある。この母は先王の妹の娘であったが、「妊娠3年、陣痛が14日続き」、生まれた子も「右手が震えており、背も高く、色も金髪であった」 [Fuller 1921: 25;

Kyerematen 1966:251] という伝承があった。

Opoku Ware は、精神病理学でいう身体イメージの毀損という形態で生まれてきた。つまり、この毀損は、「大脳と脳下垂体腺の損傷」[Wilks 1975: 331] によって誘発されたものである。この結果、幼児期には「巨人症」、成人期には「先端巨大症」という身体イメージの毀損が口頭伝承のなかで語られることになった。この精神病理学上の事実は、神話的世界で語られる「片側人間」[Needam 1980:36] と著しい対応をなす。

片側人間という文化現象は「一つの元型という心理的な要素に起因する」。片側人間という想像力の所産が元型についての適切な集合的な証拠であるとすれば、身体イメージの毀損という神話的世界で語られる王の異形は、18世紀中頃までのアサンテ王国の侵略と略奪と密接に結びついてくるのである。

Opoku Ware は、精神病理学でいう身体イメージの毀損という形態で生まれたが、この異形の＜力＞は、国家形成と結びついた「正」のイメージとして認識された。武力にすぐれ叡智をもった英雄としてアサンテの歴史の記憶のなかにとどめられている。

- (14) 王に対する呪詛が凶悪であるという証拠には、一人の男が死刑を宣告された時に王の法廷でとられる付随的な予防策がある。それは、王に対する呪詛を口にすることができないように、死刑執行人(*adumfo*) が、処刑にかかる前に、彼の両頬と舌を短剣で貫くというものである。
- (15) 1823年11月上旬には Osei Bonsu の死の知らせがギニア湾沿岸部の都市に報告されている [Wilks 1975:174]。このことから、この王は、1823年10月頃に病気で薨去したと推測することができる。
- (16) [K 3] Kusi Obodom は、1764年に退位した後に、王都クマセ郊外の Ampabami という村で、わずか数ヶ月の余生を送っている。この王は、Akyeremate という村に埋葬された。[K 5] Osei Kwame と [K 10] Kofi Kakari の埋葬された場所は不詳である。[K 11] Mensa Bonsu は、1883年に退位した。1896年に逮捕され、連行された Praso という村に埋葬された。公式の見解では、死因は赤痢であるとされている。しかしながら、噂では、刑罰による餓死、あるいは自殺とも毒殺とも言われている [Wilks 1975: 332, 539]。
- (17) 妖術師は打ち首になることはなかった。なぜなら、妖術師の血は、流されてはならなかったからである。彼らは、絞め殺されるか、棍棒で叩き殺されるか、油で焼かれるか、溺死させられるか、追放されて餓死した。
- (18) [K 9] Kwaku Dua I の妻たちは、自発的に服毒自殺した Afua と Kra Akyere という女性を除いて、すべて処刑された。
- (19) 6日の「週」は、*nwona, nkyi, kuru, kwa, mono, fo* である。7日の「週」は、*dwo* (月曜)、*bena* (火曜)、*wukuo* (水曜)、*yawo* (木曜)、*fie* (金曜)、*me-*

mene (土曜)、*kwasi* (日曜) である。

- (20) 1860年代までは、オジュラ儀礼はグレゴリオ暦の8月から10月までの時期に行われていた。[K 10] Kofi Kakari はオジュラ儀礼を11月から翌年の1月までの時期に移している。しかしながら、[K 13] Agyeman Prempeh I が1896年に国外追放になって以来、オジュラ儀礼は王都クマセでは行われていない。

- (21) 1874年のイギリスによる王都クマセ侵略で、アラビア語で記録された「年代記」は消滅した。

<付記>

本稿は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「アフリカにおける都市化の比較研究」(研究代表者 日野舜也)ならびに国立民族学博物館共同研究プロジェクト「アフリカ社会の国家形成を中心とした社会変動の民族学的研究」(研究代表者 和田正平)での研究成果の一部である。

参考文献

- Akwabi-Ameyaw, K., 1982. "Ashanti Social Organization: Some Ethnographic Classification," *Ethnology*, 21-4.
- Antti, A. A., 1974. *The Ancient Asante King*, Accra, The Bridge Publishing Company.
- Arhin, K., 1983. "The Political and Military Roles of Akan Women," in *Female and Male in West Africa*, ed. by Christine Oppong, London, George Allen & Unwin.
- Bartle, P. F. W. 1978. "Forty Days: The Akan Calendar," *Africa*, 48-1.
- Bassing, A. and Kyerematen, A. A. Y., 1972. "The Enstoolment of An Asantehene," *African Arts*, 5-3.
- Boahen, A. A. 1975 "When did Osei Tutu die?," *Transactions of the Historical Society of Ghana*, 16-1.
- Bowdich, T. E., (1819) 1966. *Mission from Cape Coast to Ashantee*, London, Frank Cass.
- Busia, K. A., 1951. *The Position of the Chief in the Modern Political System of Ashanti*, London, Oxford University Press.
- 1954. "The Ashanti," in *African Worlds*, ed. by Daryll Forde, London, Oxford University Press.
- Daaku, K. Y., 1968. "A Note on the Fall of Ahwene Koko and Its Significance in Asante History," *Ghana Notes and Queries* 10.
- 1976. *Osei Tutu of Asante*, London, Heineman.
- Danquah, J. B., 1952. "The Culture of Akan," *Africa*, 22-4.
- Douglas, M., 1970. *Natural Symbols: Explorations in Cosmology*, London, Barrie Rockliff.
- Dupuis, J., (1824) 1966. *Journal of A Residence in Ashantee*, London, Frank Cass.
- Eliade, M., 1958. *Patterns in Comparative Religion*, trans. by Rosemary Sheed, New York & London Sheed and Ward.
- Flight, C., 1970. "The Chronology of the Kings and Queen-mothers of Bono-Manso: A Reevaluation of the Evidence," *Journal of African History*, 11-2.
- Fortes, M., 1950. "Kinship and Marriage among the Ashanti," in *African Systems of Kinship and Marriage*, ed. by A. R. Radcliffe-Brown and D. Forde, London, Oxford University

- Press.
- 1969. *Kinship and the Social Order*, Chicago: Aldine Co. Pub.
- Fuller, Sir F., (1921) 1968. *A Vanished Dynasty Ashanti*, London, Thomas Nelson.
- Fynn, J. K., 197. *Asante and Its Neighbours 1700–1807*, London, Longman.
- Goody, J., 1977. *The Domestication of the Savage Mind*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Goody, J. (ed.), 1966. *Succession to High Office*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Hagen, G. P., 1970. "A Note on Akan Colour Symbolism," *Research Review* (Institute of African Studies, University of Ghana), 7-1.
- Herskovits, M. J., 1937. "The Ashanti Ntoro: A Re-Examination," *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 67.
- de Heusch, L. 1962. *Le Pouvoir et le Sacre*, Brussels: Annals du Center d'Etudes des Religions/Universite Libre de Bruxelles.
- Irvine, F. R., 1931. *West African Botany*, London, Oxford University Press.
- 川田順造, 1976. 『無文字社会の歴史—西アフリカ, モシ族の事例を中心に—』東京, 岩波書店.
- Kyerematen, A. A. Y., 1964. *Panoply of Ghana*, London, Longmans.
- 1966. *Ashanti Royal Regalia: Their History and Functions*, Ph.D. thesis, Oxford University.
- 1969. "The Royal Stools of Ashanti," *Africa*, 39-1.
- McCaskie, T. C., 1980. "Time and the Calendar in Nineteenth-Century Asante: An Exploratory Essay," *History in Africa*, 7.
- 1984. "Ahyiamu- 'A Place of Meeting': An Essays on Process and Event in the History of the Asante State," *Journal of African History*, 25-2.
- 1989. "Death and the Asantehene: A Historical Mediation," *Journal of African History*, 30-3.
- Meyerowitz, E. L. R., 1972. "Communication: The Chronology of Bono-Manso," *Journal of African History*, 13-2.
- Needam, R., 1980. *Reconnaissance*, Toronto, University of Toronto Press.
- Patton, S. F., 1984. "The Asante Kings in the Eighteenth Century: A Revised Chronology," *Journal of African History*, 1-1.
- Ramseyer, F. A., and Kuhne, J., 1875. *Four Years in Ashantee*, New York, Robert Carter & Brothers.
- Rattray, R. S., 1923. *Ashanti*, Oxford, The Clarendon Press.
- 1927. *Religion and Art in Ashanti*, Oxford, The Clarendon Press.
- 1927. *Ashanti Law and Constitution*, Oxford, The Clarendon Press.
- Reindorf, C. C., (1895) 1966. *The History of the Gold Coast and Asante*, Accra, Ghana Universities Press.
- Wilks, I., 1964. "The Growth of the Akwapim State: A Study in the Control of Evidence," in *The Historian in Tropical Africa*, ed. by J. Vansina, R. Mauny, and L. V. Thomas, London, Oxford University Press.
- 1967. "Ashanti Government," in *West African Kingdoms in the Nineteenth Century*, ed. by D. Forde and P. M. Kaberry, London, Oxford University Press.
- 1979. *Asante in the Nineteenth Century: The Structure and Evolution of A Political Order*, Cambridge, Cambridge University Press.